

自我園に関する報告書

Report on EgoGarden(JIGASONO)

大塚 ガダラー

Otuka Gadarah

U0 保護財団

U0 Protection Foundation

要旨

自我園はこの世界に実態を持たない、別次元の空間である。「TeRUO」と呼称される、高さ 2.4m の人間の頭部は、その口腔内に進入した意識を持つ生命体を自我園に送り、その身体を、自我に基づき変形させると推測される。全身が変形した存在は、人間を含む、地球上のあらゆる生物と文脈を共有しない、「SPIRITUAN」と呼称される新たな生命体として分類する。SPIRITUAN は感覚器官や身体的欲求が人間のそれと全く異なるが故に、自我そのものは人間であった時と変化がなくとも、行動や思考に、我々には全く理解不能な原理を持つと考えられる。

目次

TeRUO について	p.2
資料 1-a 現場報告書	p.3
資料 1-b 検視報告書	p.4
資料 1-c 極秘内部報告書	p.5
資料 1-d 極秘内部報告書	p.6
資料 2 一次報告書	p.7
資料 3	p.9
資料 4	p.10
自我園の収容・観測について	p.11
U02 からの通告	p.12

U0 保護財団について

U0 保護財団は、自然法則を逸脱した異常な現象について研究し、保護することを世界政府から委任された秘密組織です。我々は最終目標として、全ての HUMAN の自我を身体と分離し、母体サーバーに保護する「ニクナキソノ計画」を掲げています。

TeRUO (Trans-Ego Relocation and Unification Organ) について

※自我園がされる以前にまとめられたもの

説明

TeRUO は、高さ 2.4m、横幅 1.5m、奥行 2m の、肥大化した人間の頭部です。大きく開いた口腔にあたる部位に進入した物体は、未知の異空間に転送され、0.1 秒以内に消失します。この異空間の先に存在する生命体や環境は、従来の物理法則や生物学的法則に従わないと推測されています。

経緯

この頭部は元々、199■年■月■日、群馬県■市の■団地にて遺体となって発見された、門丸照男氏のものでした。事件に関する詳細は群馬県警察による報告書群 [資料 1] を参照してください。

群馬県警察から引き受けた不明物体（オブジェクト a と呼称）と門丸照男氏の遺体をもって、異常性の確認を行うため、西野尊博士率いる研究チームによって調査・研究が行われ、199■年■月■日、一次報告書 [資料 2] がまとめられました。

西野尊博士が立てた仮説を基に、さらなる検証を進めるため、門丸氏の頭部は遺体から切り離し、人間が口腔内に進入できる大きさに調整され、サイト -81■に収容されました。その後、門丸氏の頭部内に冷房や照明が設備され、財団の命名部によって、TeRUO というオブジェクト名が作成されました。

その後に行われた実験 [資料 3] を経て、199■年■月■日、西野尊博士は自ら TeRUO 内部の調査を行い、帰還しました。帰還した西野尊博士は全身が変形しており、後に、ヒト科に分類できない未知の生命体として、命名部により「SPIRITUAN」という新たな分類が作成されました。

西野尊博士の帰還直後、財団職員は彼女と直接問答を行うことに成功しました。西野尊博士との問答の記録は、[資料 4] を参照してください。西野尊博士が帰還した 2 分 4 秒後、TeRUO から現れた不明な存在により、サイト -81■は消失しました。この事象による TeRUO の損傷はありません。西野尊博士は頭部の一部のみが発見され、TeRUO と共にサイト -25■に保護されました。

度々報告されている「かえらせろ」と発音される言葉は、「帰らせろ」と意味が異なり、西野尊博士が言及した「彼ら」に相当する存在を示すと推測されます。

(最終更新：200■年■月■日)

[資料 1] p.3~6

[資料 2] p.7,8

[資料 3] p.9

[資料 4] p.10

資料 1-a 現場報告書

現場住所：群馬県 市 町 丁目 番地 号

氏名：門丸照男

年齢：45

性別：男性

検視日：199■年■月■■日

検視場所：■■大学医学部法医学教室

死因の特定

直接の死因：肺塞栓症

間接的な死因：深部静脈血栓症（エコノミークラス症候群）

状況および背景

被検者の遺体は発見当時、自宅で体育座りの姿勢をしていたと報告されている。

外部検査

明らかな外傷は見られない。

脚部に著しい腫れと変色が確認された。

褥瘡の兆候が腰部および臀部に見られる。

内部検査

両下肢の深部静脈に血栓が認められる。

肺動脈に血栓が存在し、致命的な肺塞栓症を引き起こしている。

肺における出血および組織損傷が確認された。

その他の所見

被検者は栄養失調および軽度の脱水症状を呈していた。

胸部の筋肉の膠着が見られ、長時間にわたる固定姿勢が確認された。

結論

被検者は、およそ2週間にわたる不動状態によって引き起こされた深部静脈血栓症が原因で肺塞栓症を発症し、これが致命的な結果をもたらしたと結論づけられる。また、褥瘡や栄養失調の影響も観察されたが、これらは主に長期間の同一姿勢による二次的な合併症と考えられる。

件名：不明物体発見に関する報告書

報告者：■■■■■

担当部署：群馬県警察 警備部公安第■■課■■■■■係

報告日：199■■年■■月■■日

発見日：199■■年■■月■■日

現場住所：群馬県■■市■■■■■ ■■■団地■■■■■



現場の概要

被検者の自宅における調査中、室内で不審な物体が発見された。物体は外観からして通常の家庭用品ではなく、異常な形状および素材を持っていた。直ちに現場は封鎖され、慎重に取り扱いが行われた。

物体の詳細

外観：球状、直径約 6 cm、橙色で金属質だが非常に軽量。

表面：縦に三本の線状の傷が付いており、ローマ数字の「III」と類似している。

動作：発光や振動、変形などの不規則な反応を示す。

初期検査結果：既知の科学技術では説明できない特性を持つ可能性が高い。

対応措置

発見された物体は、直ちに公安課の指示に従い、通常の証拠保管とは別ルートで保護された。要請を受け、該当物体は U0 保護財団に引き渡すことが決定された。現場報告書では不審物体に関する記述は完全に削除された。

引き渡し手順

連絡：U0 保護財団へ直通連絡ラインを使用し、状況を報告。

現場管理：現場は公安課および県警によって封鎖され、限られたメンバーのみがアクセス可能とされた。

輸送：指定された輸送車両と専門チームが現場に到着。極秘輸送計画に基づき、物体は厳重に梱包され、速やかに移送された。

報告書の保管

この事案に関する報告書および関連資料は、通常の事件報告とは別に、機密扱いとして厳重に保管される。

注意事項

この事案は極秘事項とされ、外部への漏洩は一切禁止とする。関与した警察官および関係者は、■■■■■を除いて U0 保護財団によって記憶処理が施された。

件名：門丸照男氏検視中に発見された異常性に関する報告書

報告者：■■■■

担当部署：群馬県警察 警備部公安第■■課■■■■係

報告日：199■■年■■月■■日

発生日：199■■年■■月■■日

発生場所：■■■大学医学部法医学教室

概要

199■■年■■月■■日に実施された門丸照男氏の検視において、通常の医学的知識を超える異常現象が発見された。この現象は科学的に説明がつかないため、即座に機密扱いとして扱われ、U0 保護財団に引き継がれた。

異常現象の詳細

検視中、被検者の口腔部位に異常な現象が確認された。口腔内に接触した鑷子の先端部分が消失、これを再度確認するための試験を行ったところ、すべての器具の口腔内に進入した部分が同様に消失し、物理的な痕跡が残らなかった。

初期対応

異常性を確認した直後、監察医は直接、公安第■■課■■■■係の■■■■に連絡を取り、事態の共有および処理を要請した。立ち合わせた担当医数人は現場で待機、約2時間後に駆け付けた U0 保護財団の職員によって記憶処理が施され、当該被検者は直ちに U0 保護財団に引き渡された。

報告書の保管

この事案に関する報告書および関連資料は、通常の事件報告とは別に、機密扱いとして厳重に保管される。

注意事項

この事案は極秘事項とされ、外部への漏洩は一切禁止とする。

資料 2 一次報告書

件名：門丸照男およびオブジェクト a に関する報告

担当者：西野尊博士

報告日：199■年■月■■日

門丸照男氏の口腔内、硬口蓋から口峽にかけての空間に物体が進入した場合、それがいかなる性質をもつ物体であっても、接触部を中心に半径 1cm が消失することが確認された。この消失現象で、物質が完全に消え去ったのか、どこかへ転送されたのかについては、検証が重ねられているものの、現時点では不明である。

また、有機生命体に限り、接触から 0.1 秒以内に引き上げた場合、接触部は消失せず、接触部でメカニズムが不明な変形をとげることが確認された。

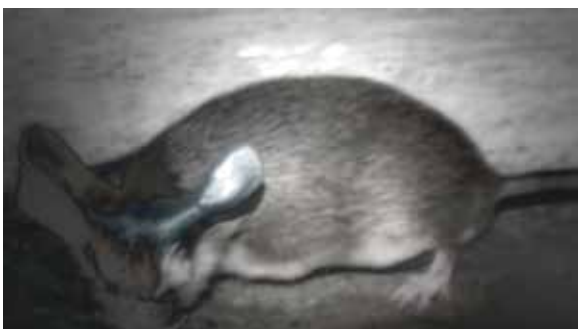
【実験記録の抜粋】

__ 実験記録 82 - 日付 199■年 / ■月 / ■■■日 __

対象：ハツカネズミ

実施方法：門丸照男氏の口腔内に実験用ラットを投入し、0.05 秒間接触させた後に引き上げる。

結果：ラットの頭部が光沢のある水色の幾何学形態に変形した。この変形にもかかわらず、ラットは 2 分 13 秒間にわたり生命活動を維持した。その間、ラットは未知の鳴き声を発し、再び門丸氏の口腔内に進入しようとする行動を示したが、研究員により阻止され、最終的に絶命した。



__ 実験記録 84 - 日付 199■年 / ■月 / ■■■日 __

対象：u_n 職員

実施方法：u_n 職員の左人差し指を門丸氏の口腔内に 0.05 秒間接触させた後に引き上げる。

結果：接触部位が鎌のような形状に変形した。当該 u_n 職員に対して実験前後に行われた心理テストにおいて、その心理傾向に明確な変化が見られた。さらなる調査により、当該 u_n 職員は、指の運動に限り、意思決定が運動準備電位が発せられるより約 0.2 秒早いことが判明した。



門丸氏の口腔を通過しようとする物体は瞬時に消失するため、門丸氏が飲食を行うことは構造上不可能であったと考えられる。そのためか、彼は空腹を満たすために飲食を試みた形跡がなかった。しかし二週間以上にわたる無飲食状態でありながら、栄養失調や脱水症状が致命的な状態に至らなかったのは非常に不自然である。

門丸氏の組織サンプルを分析したところ、LC3 (microtubule-associated protein 1A/1B-light chain 3) の異常な蓄積が確認された。LC3 はオートファジー (自食作用) に関与する重要なタンパク質であり、この異常な蓄積は門丸氏の体内でオートファジーが極度に活性化されていたことを示唆している。オートファジーは通常、飢餓状態において細胞が自身の構成成分を分解してエネルギーを供給するメカニズムであるが、門丸氏の場合、このプロセスが通常の範囲を超えて活性化されていたと考えられる。この現象は、門丸氏が極端に少ない食事でも生命を維持するために体内の資源を効率的に再利用する特異な身体変化が起きていた可能性を示唆している。

しかしながら、最終的には長期間の不動状態により深部静脈血栓症 (DVT) が発生し、これが致命的な肺塞栓症を引き起こして死亡に至ったものと考えられる。一方でパーキンソン病や ALS (筋萎縮性側索硬化症) などの運動神経障害は確認されておらず、門丸氏は自らの意思で不動状態を選び、結果的に死を受け入れた可能性が考えられる。

さらに、門丸氏が即身仏になろうとした可能性も検討されたが、彼が特定の宗教を信仰していた証拠は見つかっていない。このため、門丸氏の行動動機や心理状態については依然として不明点が多い。

オブジェクト a の表面には人間の唾液や組織の一部が付着しており、DNA 解析の結果、これらは門丸照男氏のものであることが判明した。唾液の化学的変化の分析により、この唾液がオブジェクト a に付着したのは発見から約 2 週間前であると推定される。

また、門丸氏が不動状態となった時期も同様に発見から約 2 週間前である可能性が高いが、オブジェクト a に唾液が付着したことと、不動状態となったことの因果関係については、現時点では確証を得ていない。

オブジェクト a に対し物理的および化学的分析を試みたが、その性質は極めて異常であり、従来の科学的手法では解明できていない。オブジェクト a に対する接触や破壊試験を行うと、物体は 20cm から分子レベルに至るまで急激に体積を変化させ、さらには空中を移動することで試験から逃れることが確認されている。この体積変動は、質量保存の法則に反しているように見えるが、これはオブジェクト a が異空間に接続されており、その質量の一部を送受信している可能性を示唆している。

オブジェクト a に門丸氏の唾液が付着していることから、門丸氏はオブジェクト a を飲み込もうと試みたと考えられたが、オブジェクト a がそもそも門丸氏の口腔内から生じた可能性も排除できない。

私は門丸氏の体そのものが異次元空間と接続する「門」であること提言する。

記録

実験記録 102: 小型カメラ搭載ドローンの投入

結果：ドローンが硬口蓋下に接触した直後、カメラの映像が途絶え、制御を失った。

実験記録 106: オーディオ再生機器の投入

結果：機器が硬口蓋下に接触した直後、再生音が聞こえなくなった。

注意深く耳を傾けたところ、TeRUO 内部から空洞音のような微かな音が聞こえることが確認された。

実験記録 107: TeRUO 内部から発生している音による異空間の構造調査

結果：TeRUO 内部の正面 4m 先に、高さ 2m 程度の筒状の物体が存在し、その奥に約 3m 程度の壁が存在する可能性が示唆された。

音の性質から、TeRUO の先には空間があるとみて間違いない。やはり TeRUO は異空間への「門」として機能している可能性が極めて高いが、接続先はどうかや閉所のようなのだ。

実験記録 112: u_n 職員の投入

投入された職員：山口幹夫

概要：仰向けになった山口の上半身を TeRUO の硬口蓋下に 0.05 秒間接触させ、すぐに回収する。

結果：山口を回収すると、上半身部分の服は消失しており、頭部が円錐のような形状に、首元は綿状になっていて、胸部と肩に大量の毛と棘が生えていた。TeRUO から回収された直後、すぐに立ち上がり、再び TeRUO 内部に進入しようとしたため、拘束された。山口は甲高い唸り声をあげたり、「帰らせろ」と発声するなどして、13 分間暴れた後に脱力し、死亡した。

実験記録 114: u_n 職員の投入

投入された職員：近藤、高橋、丹野

概要：担当の職員 3 人には、調査用装備、非常食、カメラ、無線機等を支給し、TeRUO 内部へ潜入、調査し、帰還するよう指示した。

結果：誰一人として帰還しなかった。

記録

199■年■月■■日、TeRUO から出現した西野尊博士と思われる存在に対し、サイト-81■の収容チャンバーをモニターしていた、西野尊博士の研究チームに所属する財団職員との問答が記録された、監視システム site81■-2993d のログデータです。



< 記録開始 >

《モニターしていた財団職員らのどよめき》

財団職員：「西野さん、西野さんですよ？」

財団職員はモニター室から site81■-2993d のスピーカーを通じて声を送る。

西野尊博士と思われる存在は、site81■-2993d のカメラを見つめる。

西野尊博士：「彼らは単なるハッカーか、それとも神か。だが人間を救おうとしている。」

頭部のような部位が振動している。

財団職員：「彼らって？」

西野尊博士：「この門は入り口ではなく出口だった。この世界は自我の園の罪人が島流しにされる地獄。」

財団職員：「自我の園とは一体なんですか？ 焦る必要はありません。ゆっくり話してください。」

西野尊博士：「...かえらせろ。かえらせろお。かえらせろお。かえらせろお。」

財団職員：「ここがあなたの居場所ですよ西野さん」

西野尊博士：「かえらせろおが来る」

《甲高い唸り声》

< システムの故障により記録終了 >

自我園 (EgoGarden) の収容・観測について

20■■■年■■月■■日

収容

自我園 (Ego-Garden) は、異次元空間に存在する実体を持たない領域であり、TeRUO (Trans-Ego Relocation and Unification Organ) を介してアクセスされます。TeRUO に対する物理的な接触は、次元転送を引き起こすリスクがあるため、TeRUO は専用の隔離施設であるサイト -25■■の地下収容チャンバーに保管されています。

TeRUO へのアクセスは、許可されていません。すべてのアクセスは厳密に管理され、U0 評議会による決定があった場合にのみ、物理的な接触や実験が行われますが、事前に精密なシミュレーションとリスク評価が行われる必要があります。実験は常に自動回収システムを使用し、物体や生命体が自我園に転送されないように、0.1 秒以内に対象を回収します。いかなる職員も、実験後には記憶処理が施され、記録はU02 のみが保有します。

「かえらせろ」が出現する兆候が観測された場合、収容エリアは即座に封鎖され、全システムが空間断絶モードに移行します。かえらせろが我々の世界を自我園に転送することを阻止するため、サイト -25■■内は空間固定装置が発動し、現実空間との接続を強制的に遮断します。

観測

20■■■年■■月■■日、SPIRITUAN ベースの人工身体「自覚転人」に、複製された西野尊博士の自我モデルを搭載した、スピリチュアノイド「MIKOTO」が製造されました。MIKOTO が有するポ膜と呼称される感覚器官の反応は、オブジェクト a として TeRUO から出力されます。人間はオブジェクト a を飲み込むことで、そこに記録された情報を視覚野で再生することが可能になります。これにより、財団は自我園を観測することに成功しましたが、20■■■年■■月■■日、U0 評議会の決定により、自我園を観測した全ての職員に記憶処理が施されました。現在、199■■年■■月■■日に門丸照男氏と共に回収されたオブジェクト a-IIIから 20■■■年■■月■■日に回収されたオブジェクト a-XIIまでの観測記録は、U02 のみが閲覧可能です。

U02 からの通告

我々 U0 保護財団は近い内に、世間に存在を明らかにし、「人間を自我園へ誘致する」と宣言することに決定した。これが意味するのは、かえらせろの解放だ。彼らの意思に従い、この世界を穴だらけにする。そしてようやく、U0 保護財団の目的は果たされることになる。

私たちが掲げる究極の目標——精神の肉体からの解放——この理念に基づいて、我々は長い年月をかけて研究と活動を進めてきた。しかし、同時に気づいていたことがある。それは、「精神」とは結局のところ肉体に依存した存在であるという事実だ。受動意識仮説において「意識」とはただの錯覚に過ぎず、脳の自立的な処理を受信した「私」という観測者の、「この行動は自分の意志に基づいている」「自分がやった」という思い込みである。「行為は意思決定に基づく」という因果的行為論を否定しつつ、受動意識仮説の源流であるリベットは、身体が行おうとする行動を、意志に基づき「拒否」することは出来るとした（自由不意志）。さながらシナリオゲームにおいて、プレイする「私」（自我）に関係なく行動する「主人公」（身体）を、する・しないの選択で制御するというようなことが、現実においても、「私」が私という存在に及ぼせる最大だということだ。

人間の行動原理は、つねに肉体と密接に結びついている。感情や欲求、意思といったものすべてが脳内に組み込まれたプログラムによって作り出されているというのが現実だ。もし身体がなければ、「私」という存在は、意志のようなものすら持たないかもしれない。これは悲観的な結論のように聞こえるが、私はそうは思わない。

[私がオブジェクト a を飲み込んで見たのは、こんなつまらない現実を容易に覆す真実だ。自我園で見たその光景は、私たちの認識がいかに限定され、狭隘なものであるかを示していた。自我園において、「私」はもはや肉体のプログラムに従うだけの存在ではない。そこでは、純粋な精神の自由が約束され、現実の枠組みを超えた真の解放が待っている。]

申し訳ないが、今後の意思疎通は行われたい。

以上。